

なほききにまがれる枝もある物をけをふききすをいふがわりなき

〔漢語大和故事〕漢書云吹毛求疵。又云洗垢求其癩瘡。この語は我身の過を求出すの喩也。毛をふけば、身體の疵あらはるべきぞ。人の惡を知らんとて、餘り吟味すれば、反つて我身の過に落る事あるべし。其時始のまゝにて置たらばと思ふ事あらん。是毛を吹て疵を求るものなり。高津内親王の歌に、直木にも曲れる枝もあるものを毛を吹疵をいふがわりなき。

〔沙石集^五上〕慈心有者免鬼病事

世間ノ諺ニモニギレル拳シ。咲ル面ニアタラズトテ、惡クヒケ無ク、心ノ底ヨリ、打チ咲テムカヘル者ニハ、既ニ、ニギレル拳ヲ開テ、心ヲ止ト云リ、サレバ佛性ヲ顯ハサント思ハシ人、慈悲ヲ心ニ習ヒ好ムベキナリ。

〔太閤記〕秀吉初て普請奉行の事

主君の爲に宜しき事あれば、不移時申上げる心の内を推察し見るに、自然に忠義に深き素性也。其はさし出者よと制し給ふ事、あまたたびの事なりしかば、皆人あれほどつらの皮の厚かりしは、見も聞もせぬなど、聞や聞ぬ計に目引鼻ひき笑ひけり。

〔太閤記^{十三}〕備前の宰相秀家卿小西を助成し衆にこへ渡海の事

小西思ふやう、忠州之城をも乗捕、彌抽忠勤ばやと、弟にて侍る主殿助木戸作右衛門尉など呼あつめ、御勢悉く渡海し、諸勢今明日之中參陣有べきとなり、いざ明朝忠州之城を忍び捕べきと思ふは、いかゞ有べしと云ければ、何も尤なり、急ぎ給へとて、ひたくと用意し、戌之刻に打立、漸く丑之時とおぼしき比、城の麓に忍び寄、墮と時聲を上、嗖々聲を舉しかば、城中寢耳に水の入たるが如く、驚きあへりつゝ、矢夾間などを塞あへず、忘却於親疎、我さきに退なんとのみせしなり。

〔北條五代記^八〕北條家の軍に貝太鼓を用る事